No. 113 May 2021

AAINews

人と農と環境をつなぐ技術を考える

国際耕種株式会社
〒194-0013
東京都町田市原町田 1-2-3
アーベイン平本 403
tel　042-725-6250
fax　042-785-4332
mail aai@koushu.co.jp
URL www.koushu.co.jp

イスラマバード再渡航
-新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急退避から 1 年-

2020 年 3 月に新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、イスラマバードを退避してから、「パキスタン国バロチスタン州農業普及員能力向上プロジェクト」の活動は、国内からの遠隔運営となっていたが、約 1 年ぶりとなる 3 月上旬に、イスラマバードに渡航した。出発地の成田空港や中継地のドーハ空港は以前に比べ、人が少ないようだったが、ドーハ発イスラマバード行きの機内は、ほぼ満席で、航空便が少なくなっている中、どうしても移動しなければならないパキスタン人が、数少ない便に殺到しているのだろうと感じた。

久しぶりに見るイスラマバードの街は、1 年前とくらべ、人通りも車の渋滞も縮小した様子はなく、マーケットには見慣れた露店が並び、行きつけのスーパーやパン屋の品ぞろえも変わりなかった。もちろん、以前とは異なり、多くの人がマスクをしていたり、ホテルに入るときなどには検温するという、感染拡大予防策が取られていることは大きな変化ではあるが、世界中で起こっているそのような変化よりも、変わらぬ街並みの方が印象的であった。

プロジェクト事務所のある国立農業研究センターでは、この一年間、現地でプロジェクトを支えてくれた C/P や、現地スタッフに再会することができた。困難な状況の中で、プロジェクトを支えてくれた彼らとは、パキスタン流に抱擁をし、肩をたたき、再会を喜びあうのが普通であるが、今回は、お互いに密接を避け、少し距離を取って挨拶を交わした。マスクをしていては、微笑んだ口元さえ見えないが、皆こうした習慣にも慣れているようであった。

C/P や現地スタッフと話していると感染予防の「新しい日常」が定着している反面、新型コロナウイルスの感染状況に「慣れ」も生じており、特に、普及員の活動する農村部では、新型コロナに対する警戒心は薄く、マスクをする人も少ないという話であった。その一方で、昨年 8 月頃に新型コロナウイルスに感染し、立って歩けないほどに辛い思いをしたという C/P もいて、確実に感染のリスクが身近にあるということも感じた。

我々の渡航した 2021 年 3 月は、パキスタン国内の感染者数はやや落ち着いてきている状況であった。レストランでは「3 密」を避けるため、室内での食事が禁じられているので、街では夜になるとレストランの外に並べられたテーブルに多くの客が集まり、かえって賑やかな様子に見えた。これまで自粛していた結婚式を挙行する人も多くなったようで、賑やかな音楽がホテルの部屋まで、聞こえてくることもあった。人々が感染予防のための「新しい生活様式」を受け入れながらも、家族や友人たちとの絆を大事にする本来の生活様式に近い形を模索している姿だろうと思った。

この 1 年間、遠隔でのプロジェクト運営を支えたのは、現場で一緒に働いてきた C/P やプロジェクトスタッフと信頼関係であった。実際に会って、時と場所を共有すると通じ合うものは多く、今回の短い渡航期間に、プロジェクトにかかわる人たちに直接会えたことは貴重な機会だったが、一方で、会えない時こそ絆を大切にする気持ちが必要だろうとも思う。

CP 機関へのプロジェクト進捗報告の様子

各国農業普及事情の比較分析 ＜その 5＞

普及局と外部組織との連携　（1）試験場との連携

当シリーズでは、普及員や普及局[1]に焦点を当ててきたが、農業振興は普及員・普及局によってのみ実現するものではない。そこで今回は普及局が連携する外部組織に注目したい。

これまで我々が業務を通して、目にした普及局と外部組織の連携の事例を区分すると、試験場、大学などの研究組織、バイヤーや資材店といった民間、そして政府や国際機関、NGO といったドナーに大別された。本稿では、まず、最も重要と思われる試験場との連携について取り上げる。

「現場の問題を普及員が試験場に伝え、問題解決の技術を試験場が研究・開発し、その技術を普及員が現場に普及する」というのが、理想とする農業技術普及のかたちであることは異論のないところだと思う。この普及と試験研究の関係という点において考えると、日本の普及局と試験場[1]との連携は、高いレベルにあると言える。一方、多くの途上国では、連携や定期的な情報交換はおろか、ほとんど交流がなく、普及現場と試験研究に距離があるケースも多いようである。その要因を探るため、日本と途上国の事例を比較してみた。

まず日本の事例として、茨城県では、県農林水産部の出先機関として、農業総合センターがあり、県内農業の普及、研究、教育を担う部署が設置されている。これらの部署間では人事交流があり、各部門への理解と人的連携の基盤が築かれ、密な連携がとられるように配慮されている。一方、多くの途上国では、試験場といえば、国か地域レベルで、普及局が属する地方自治体にはないことが多い。そのため普及局と試験場との間に人事交流はなく、連携も密ではないケースが多い。それでも例えば、スーダン国のように各州に試験場と普及局がある場合は、ある程度の連携がとれていたように見られた。またネパール国では試験場も普及局も農業省に所属する組織であったため[2]、ほかの途上国と比べて、連携があったように思われた。これらを鑑みると、組織構造は組織間連携に影響していると思われた。

また日本では普及員と試験場職員（研究員）は業務上、対等な立場にあると言えるが、我々が業務をした多くの途上国では、両者には大きな隔たりがあった。ある国では、大学卒業時の成績によって、「研究員」と「普及員」に分けられていた。当然、普及員は研究員に対し、劣等感と距離感を感じ、そのために業務上の乖離が生じているように見受けられた。一方、研究員は修士・博士の学位を持っていることが多く、エリート意識が強い。それゆえ試験研究テーマも、自国の農家が抱える問題よりも、先端技術の研究に興味が偏ってしまう傾向があるようである。

この点において、国際耕種が JICA 事業として数年にわたって携わっているパキスタン国の普及員能力向上プロジェクトでは、興味深い変化が見られる。プロジェクトでは、普及員研修の講師役を州および国の研究員にお願いしているが、研修後、参加した普及員からは「研究員と知り合いになれてよかった。」という声が非常に多い。同様に普及員から質問攻めにあった研究員からはプロジェクトに「現場の様子が知りたい。連れて行ってほしい。」という声が上がっている。まさにそれまで離れていた普及員と研究員、普及現場と試験研究が繋がった事例である。

我々が現場で業務に従事する際は外部の人間である。その我々が組織の構造的な問題解決に取り組むのは難しい。一方で組織や意識の壁を超えて、人的な交流・連携を進めることができるのは、外部の人間だからこそ、突破できる課題なのかもしれないと考えさせられた。

一緒に土壌サンプルを採取する普及員と研究員（スーダン国）

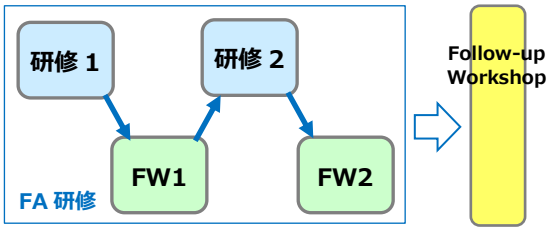
1 本シリーズでは普及員が所属する公的組織を「普及局」、農業技術にかかる試験研究を担う公的機関を「試験場」と統一して表記する。
2 ネパール国では近年にシステム改変があり、現在は異なる組織構造であるとのこと。

プロジェクトの遠隔運営を考える＜その 4＞

計画段階から予定されていた遠隔運営

今回はパキスタン国 KP (Khyber Pakhtunkhwa)州の事例を取り上げて、計画段階から遠隔でのプロジェクト運営を行った事例を紹介する。このプロジェクトは、パキスタン北西部の山岳地帯に位置する KP 州の農業普及員（FA; Field Assistant）の研修によって、普及員の能力向上を図り、農民への適切な技術や知識を普及させることをめざしている。しかし、KP 州はアフガニスタンと国境を接しており、アフガン紛争勃発以降、深刻な治安問題に直面し、外国人の立ち入りは厳しく制限されていた。

本プロジェクトの特徴は、下図のように研修に実地活動（FW; Field Work）を組み込むことにより、普及員が研修で得た知識・技術を現場でどのように生かしていくかを、実践を通して学ぶという仕組みにある。



まず「研修 1」では農業技術や農業普及に関して基礎的な事柄について学び、「FW1」では現場農家の実態や抱えている問題点を明確にするための農家調査を実施する。続いて「研修 2」では、「FW1」で明らかになった農家の課題解決に資するような技術や知識を学び、それらを農家に伝えるべく普及活動として「FW2」を実施する。最後に「Follow-Up W/S」で全体の振り返りを行って、その後の活動に活かしていく。

このように研修と普及活動を連携させた研修フローの中で、普及員には研修成果を発揮する「場」や「機会」が与られ、そうした活動を通して普及員は自信を深め、農家との関係性の改善に努めることができた。また、普及員が効果的な普及活動を実施するためのツールとしての様々な普及教材（ポスター、パンフレット、テキスト、ビデオ）についても、研修活動の一部として普及員による作成プロセスを大切にした。

上記活動の内、研修活動は日本人専門家のいる首都イスラマバードで実施されたが、KP 州への立ち入りは治安上の理由から制約が大きかったため、州内における普及員の実践活動は遠隔操作によって管理・運営されることがプロジェクトの計画段階から予定されていた。この際、M&E (Monitoring & Evaluation) Officer と呼ばれる、普及員の活動をモニタリングする役割を持つスタッフの働きが不可欠であった。

M&E Officer は、現地への立ち入りができない日本人専門家の目となり耳となって、普及員の活動をモニタリングして、レポートとして報告する。こうした遠隔のモニタリングでは、この M&E Officer の存在と活用がきわめて重要であった。より良いモニタリングを実施するために工夫したことは、モニタリング・レポートの書式を整えて報告すべき事柄が的確に書き込めるようにしたことに加えて、M＆E の人選には格別注意を払って行った。そこで特に重視したのは、過去にモニタリング業務の経験があるかどうかより、フィールド作業をいとわないフットワークの軽さや、普及員とうまくやっていけそうな人柄の良さを重視して、面接によって選考した。

M&E は現場からの情報を得る上で必要不可欠のものであるが、逆に M&E の「フィルター」を通った情報しか得られないという側面もある。百聞は一見に如かず。現場で得られる情報の質と量をどう改善していくかは今後の課題である。

自身が作成した普及教材を使って農家に病害防除の説明をする普及員

農園を訪ねて ＜その 1＞

株式会社国際農業開発 南足柄農場

我々はこれまで国際技術協力に携わる傍ら、「日本の地域や農業にどのように関われるのか？」ということを常に考えてきた。そして機会を見つけては、目新しい取り組みをしている農園を訪問し、多くのことを学んできた。不定期である本連載では、これまで訪問した農園の紹介をしながら、感じたことについて書き綴ってみようと思う。今回、神奈川県南足柄市にある株式会社国際農業開発の農園を取り上げる。我々と交流のある一般財団法人国際開発センターの方々からのお誘いを受け、定期的に行われているというみかんの収穫作業のお手伝いに取り組んだ。

国際農業開発は、政府開発援助に長年携わってきた黒柳氏が仲間と「自分たちが作ったコメで酒を造り、それを自分たちのレストランで飲もうではないか」という夢を抱き、2016 年 1 月に設立した。主な事業内容は、農業生産・販売、農業体験、人材育成、コンサルタント等である。南足柄市に 15 カ所の農場があり、全体規模は約 40,000 ㎡である。今回我々は、その 15 カ所の内、2 つの拠点である、南足柄市怒田にある広さ 1,115 ㎡のみかん農園と 1,000 ㎡の野菜畑を訪問した。

当農園は、丹沢山地と箱根山の外輪を見ることができ、富士山と丹沢山地を源流としている酒匂川が流れ、南の相模湾からは温暖な海風が吹き込む、豊かな水と温暖な気候に恵まれている。この地域で、国際農業開発は米、野菜、果樹、しいたけ等の生産・販売活動をしている。

今回訪問したみかん農園は、温州みかんを慣行農法で栽培している。富士山が見える、水がきれい、温泉があるという点が、南足柄を生産拠点として選んだ理由だと黒柳代表より詳説があった。そして、農業は地域に根差してはじめて成り立つ、そのために地域に貢献することが大切だということ、さらにその先に、全国・海外展開を通した地域貢献も考えているとの説明もあった。この代表の想いを聞いた上で、みかん収穫作業に取り組んだことから、ただのお手伝いとしての収穫作業以上のやりがいを感じることができた。

今回のみかん収穫作業は、いわゆる観光農業のようなプログラムとは違うが、誰でも容易に作業できるように、行き届いた準備がされていた。収穫後は、大きさ別に選果し、木箱に詰めて、貯蔵庫へ搬入し乾燥させる。これらは会員制宅配サービスや地域のマルシェへ出荷されるとのことである。お昼休憩では、各農場の生産活動の結晶である、おにぎり、イチジク、そして有機栽培の野菜が入った豚汁、ミニトマト、みかんの手絞りジュース等が用意されていた。事前説明から、収穫作業、休憩時間までもが充実しており、すべての作業を終えた後は達成感があった。さらに、みかんや他の農園で収穫されたイチジク、トマトを袋一杯にもらえて、最後まで楽しむことができた。

「南足柄を楽しむ」を出発点とし、農地が快適で楽しい空間となるよう、生産機能にとどまらない農地の機能を活用することで、地域の農業の価値を高め、それが農地を守るきっかけにも、南足柄への魅力の発見にもつながっているのだと感じた。帰りの道中では、黒柳代表の案内で、1,000 ㎡の野菜畑の見学もさせていただいた。畑や農道は、黒柳代表が自ら開墾、整備したとのことで、農園にかける並々ならぬ熱意を改めて感じた。

夢を核として、農場で働く生産者、友人知人や地元・地域の支援者、応援してくれるファン、そして南足柄の豊かな自然資源が、農を通してうまくつながる取組みや工夫には感銘を受けた。また作業を通じて得られる達成感や発見、交流、味覚や、「食」と「農」の醍醐味の伝え方等、我々の志向する地域おこしの実践に向けて多くの学びを得る訪問となった。

みかん農園にて黒柳代表による挨拶と作業説明の様子